

わたしが
みつける
新しい
モネ。

モネ
それから
100年

P R E S S R E L E A S E

MONET'S LEGACY

2018 7 | 14 SAT ▶ 9 | 24 MON HOLIDAY



横浜美術館
YOKOHAMA MUSEUM OF ART

モネは、いまも生きている。

印象派を代表する画家、クロード・モネ。ひたすらに風景を見つめ、描き続けたこの画家の遺した絵画は、いまなお人々を魅了してやみません。そしてその芸術のもつ独創性、創作上の関心は、今日の作家たちにさまざまな形で引き継がれています。

モネが最晩年、画業の集大成となる《睡蓮》大装飾画の制作に着手してから約100年。豊かな色彩のハーモニーが観るものを包み込むこの作品は、モネの絵画が以降の美術史に与えた影響を顧みる際にしばしば引き合いに出されてきました。しかし、モネの長いキャリアをあらためて俯瞰するとき、そのあらゆる時期の作品に画家の独自性、先駆性が刻印されていることに気づきます。

本展では、モネの初期から晩年までの絵画25点[※]と、後世代の26作家による65点とを一堂に展覧し、両者の時代を超えた結びつきを浮き彫りにします。躍動する描線、画面内で響きあう色彩、変幻する光や大気の一瞬を捉える眼差し、風景のなかに没入していくような構図、フレームの外へといざなうイメージの拡がり…。モネの作品の多面的な特質を国内外のさまざまなアートに接続することで、「印象派の巨匠」という歴史化された肩書を超え、いまなお生き続けるモネの芸術の豊かさ、その普遍的な魅力に迫ります。

なぜ、モネの絵画に魅せられるのか——。本展を通じて、皆さまがそれぞれの「好き」の理由を見つけてくださることを願っています。

※展示期間限定の作品も含まれます。



photo: Nadar
Musée Marmottan Monet,
Paris, France / Bridgeman Images

クロード・モネ Claude Monet (1840-1926)

1840年	パリに生まれる	1878年	ヴェトウイユに移る
1845年	一家でル・アーヴルに移る	1879年	妻カミーユ死去
1858年	ウジェーヌ・ブーダンに出会い、戸外で風景画を描くようになる	1883年	パリ郊外のジヴェルニーに居を定める
1859年	パリに移る	1888年	「積みむら」の連作に着手以降、「ボブラ並木」「ルーアン大聖堂」などの連作を発表
1862年	パリのグレーールのアトリエに入り、ルノワール、シスレー、バジールらに出会う	1892年	アリス・オシュデと再婚
1865年	サロンに初入選	1897年	「睡蓮」の連作に本格的に取り組む
1870年	カミーユ・ドンシューと結婚 ロンドンで画商デュラン＝リュエルと知り合う	1909年	デュラン＝リュエル画廊で「睡蓮」の連作48点による個展開催
1871年	妻子とともにアルジャントウイユに移る	1912年	白内障との診断を受ける
1874年	ピサロ、ドガ、ルノワールらと、画家主催の展覧会をパリで開催。《印象、日の出》出品(のちに第1回印象派展と呼ばれる展覧会、モネは以降1882年まで計5回参加)	1914年	《睡蓮》大装飾画に着手
		1918年	《睡蓮》大装飾画の国家寄贈をクレマンソー首相に提案
		1926年	ジヴェルニーで死去
		1927年	オランジュリー美術館の《睡蓮》大装飾画が一般公開される

MONET'S LEGACY

◎ 出品作家

クロード・モネ (1840-1926)
Claude MONET

アルフレッド・スティーグリッツ (1864-1946)
Alfred STIEGLITZ

エドワード・スタイケン (1879-1973)
Edward STEICHEN

マーク・ロスコ (1903-1970)
Mark ROTHKO

ウィレム・デ・クーニング (1904-1997)
Willem DE KOONING

モーリス・ルイス (1912-1962)
Morris LOUIS

サム・フランシス (1923-1994)
Sam FRANCIS

ロイ・リキテンスタイン (1923-1997)
Roy LICHTENSTEIN

ジャン＝ポール・リオペル (1923-2002)
Jean-Paul RIOPELLE

ジョアン・ミッチェル (1925-1992)
Joan MITCHELL

アンディ・ウォーホル (1928-1987)
Andy WARHOL

ゲルハルト・リヒター (1932年生まれ)
Gerhard RICHTER

ルイ・カーヌ (1943年生まれ)
Louis CANE

堂本尚郎 (1928-2013)
DOMOTO Hisao

中西夏之 (1935-2016)
NAKANISHI Natsuyuki

松本陽子 (1936年生まれ)
MATSUMOTO Yoko

平松礼二 (1941年生まれ)
HIRAMATSU Reiji

根岸芳郎 (1951年生まれ)
NEGISHI Yoshiro

岡崎乾二郎 (1955年生まれ)
OKAZAKI Kenjiro

児玉靖枝 (1961年生まれ)
KODAMA Yasue

鈴木理策 (1963年生まれ)
SUZUKI Risaku

福田美蘭 (1963年生まれ)
FUKUDA Miran

丸山直文 (1964年生まれ)
MARUYAMA Naofumi

湯浅克俊 (1978年生まれ)
YUASA Katsutoshi

小野耕石 (1979年生まれ)
ONO Koseki

児玉麻緒 (1982年生まれ)
KODAMA Asao

水野勝規 (1982年生まれ)
MIZUNO Katsunori



クロード・モネ《睡蓮》1906年 油彩、キャンバス 81.0×92.0cm 吉野石膏株式会社(山形美術館に寄託)

みどころ

モネ
それからの
100年

1 日本初公開作品も！
モネの絵画の魅力を
さまざまな切り口から再発見。

日本初公開の知られざる作品を含むモネの絵画25点を展示。
モネの画業の変遷をたどりながら、そこに通底する特質を捉えなおし、時代を超えて愛されるモネの芸術の魅力に迫ります。

2 ロスコ、ウォーホル、リキテンスタイン…
20世紀アートとモネと一緒に楽しめる！

アメリカ抽象表現主義の代表的画家マーク・ロスコやモーリス・ルイスをはじめ、1950年代以降の絵画を展示し、「モダンアートの先駆者」と称されるモネの革新性を浮き彫りにします。

3 本展のための新作も！
今日の多様なアートに、
モネとの共鳴を見出す。

現在活躍中のアーティストの作品も、新作を含め多数展示。
絵画のみならず、版画・写真・映像など幅広い分野の現代アートに、モネの芸術との時代・地域・ジャンルを超えたつながりを見出します。

新しい絵画へ

—立ちあがる色彩と筆触

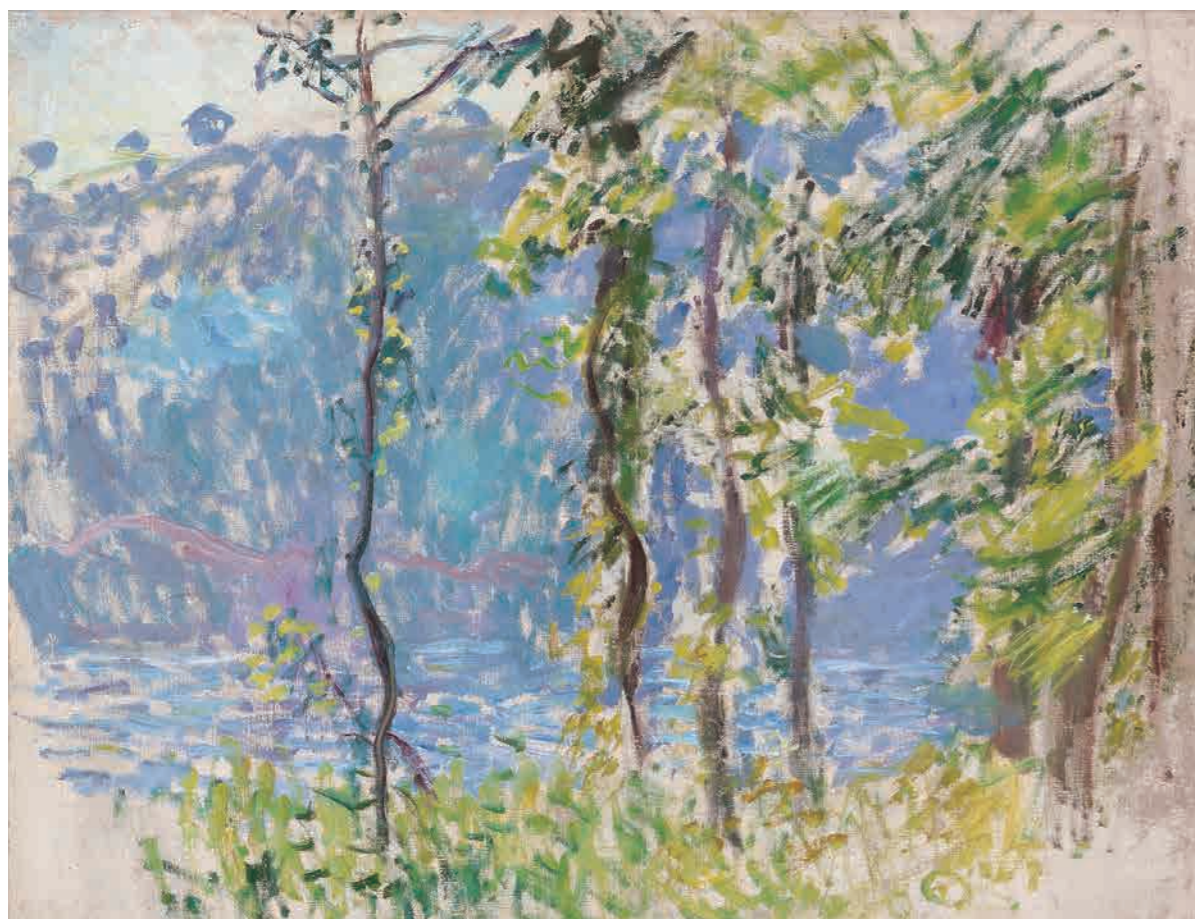
1850年代後半から戸外での絵画制作をスタートし、1870年代には印象派グループの中核として活動したモネ。その画業前半の作品群には、晩年の創作へとつながる資質が随所に垣間見えます。

眼前の光景を筆致／色彩単位で画面に再構成する「筆触分割」は、その象徴です。明暗や遠近法を重視した従来の表現から一歩踏み出し、色彩そのものの輝き、響きあいにより主眼を置いたこの手法は、絵画の新しいあり方を指し示すものでした。モネの絵画には、印象派期以前からすでにその革新への予兆を認めることができます。

本章では、1870年代の印象派期をまたぐキャリア前半の作品群を手がかりに、現代へと通じるモネの芸術の先駆性を再確認します。対象の細部描写から離れた色彩の自律的な使い方、絵具の物質性や「描く」行為そのものの提示といった傾向は、具象／抽象を問わず現代の画家たちが関心をよせる諸課題へと結びついています。

日本
初公開

モネがジヴェルニーに居を定めた年に、その近郊の町で描いた作品。木立の間からセーヌ河と山とを望む風景であるが、各所に余白を残した描写の即興性が特徴的で、この時期のモネの絵画のなかで特に抽象的志向が強い一作である。



クロード・モネ《ヴェイルの風景》1883年 油彩、キャンヴァス 60.3×78.8cm 個人蔵 ©Christie's Images / Bridgeman Images

目の前の対象が何かは忘れよう。
（中略）
そしてただ見たままを描くのだ、
見たままの色を、形を



クロード・モネ《モンソー公園》
1876年 油彩、キャンヴァス 56.0×69.5cm 泉屋博古館分館
※展示期間：7月14日(土)～8月17日(金)

パリ市内の有名な公園の風景。モネの印象派期の作品で、筆触分割の手法が各所に認められる。右半分いっぱいにはマロニエの木を配する大胆な構図、赤と緑のコントラスト、奔放な筆づかいとがあいまって、華やかで活気に満ちた画面が創出されている。



中西夏之《G/Z 夏至・橋の上 To May VII》
1992年 油彩、キャンヴァス 182.0×227.5cm 名古屋画廊

中西の絵画において最もベーシックな色である白、緑、紫を基調とした一作。題名からも想起されるように、中西にとって絵画制作は「時間」と「光」とを内包する場の生成であり、その点にモネの創作上の関心との共鳴を見いだせよう。

*Essayez d'oublier les objets que vous avez sous les yeux, [...],
et peignez le exactement comme cela vous parait,
la couleur exacte et la forme [...].*



丸山直文
《puddle in the woods 5》
2010年 アクリル、綿布 227.3×181.8cm 作家蔵
© Naofumi Maruyama, Courtesy of ShugoArts

初期の抽象画制作を経て、1990年代後半から風景をメインモチーフに制作を続ける丸山。淡さと鮮やかさを併せもった色斑のハーモニーによって、木々に囲まれた水辺の情景を、虚実の狭間に佇むような独自の絵画空間へと昇華させている。



クロード・モネ《セーヌ河の日落、冬》
1880年 油彩、キャンヴァス 60.6×81.1cm
ポーラ美術館

1878年にモネが転居したパリ北西部の村ヴェトウイユ。氷結したセーヌ河の光景に想像力を刺激されたモネは、大気、光線、水面の表情が刻々と変化するさまを異なる時間帯で描き分けた。後半生に没頭する「連作」の先駆けとなったシリーズである。



モーリス・ルイス《ワイン》
1958年 アクリル、キャンヴァス
234.6×374.0cm 広島市現代美術館

ルイスの絵画を代表する「ヴェール」シリーズの一作で、絵具を垂れ流して画布に染み込ますステイニング(滲み)という技法が用いられている。繊細に重ねあわされた色彩同士の豊かな協和が、モネの絵画と同様、観るものの感覚に直接訴えかけてくる。

水野勝規《reflection》

2012年 シングルチャンネル・ビデオ(HD、サイレント/9分)
作家蔵

自然風景の定点撮影にもとづくスケッチ映像集的な作風で知られる水野は、新作を含む3点を出品。《reflection》では、水面に反映した木々が巨大スクリーンいっぱいに映し出され、具象と抽象の間を往還するように、フォルムを刻々と変化させていく。



*Le motif est quelque chose de secondaire,
ce que je veux reproduire,
c'est ce qu'il y a entre le motif et moi.*

形なきものへの 眼差し — 光、大気、水

モネの絵画のモチーフといえば、「睡蓮」「積みわら」などが思い浮かびます。しかし、モネが生涯を通じてもっとも執着したモチーフは、特定の物体よりもむしろ「形なきもの」だったのではないのでしょうか。風景は、風のそよぎ、大気のゆらぎ、光線の移ろいといった刹那の要素に満ちており、そこにこそ自然の本質があるとも言えます。モネが目指したのは、その変幻のなかの瞬間をキャンヴァス上に写しとどめることでした。

移ろう光や大気への関心は、1900年前後のロンドン滞在期に最初の頂点を迎えます。ハイライトやグラデーション、薄い塗り重ねによるレイヤー、色のにじみといった視覚効果によって、モチーフは輝く画面のなかに溶解し、焦点や遠近を失ったオールオーバーな色面の拡がりへと至ります。

本章では、光、大気、蒸気、水などの不定形なモチーフをめぐるモネの視覚的探究を軸に、風景の抽象化、移ろいや瞬間性の可視化、あるいは色の塗り重ねによる絵画独自のレイヤーや光の創出といった志向を共有する現代アートを紹介します。

何を描くかは二の次で、
私が本当に表現したいのは、
描くものと自分の間に横たわる
「何か」なのです。



クロード・モネ《霧の中の太陽》
1904年 油彩、キャンヴァス 71.0×91.5cm 個人蔵

モネは1899年から数年にわたり、ロンドン名物である霧に包まれたテムズ河畔の光景を繰り返し描いた。淡い色彩の重なりが生み出すヴェールに覆われたような空間表現に、印象派の筆触分割を乗り越えた画家の新たなヴィジョンが示されている。



ゲルハルト・リヒター《アブストラクト・ペインティング(CR845-8)》
1997年 油彩、アルディボンド板 100.0×90.0cm 金沢21世紀美術館
撮影:木奥恵三 画像提供:金沢21世紀美術館 ©Gerhard Richter 2018(0005)

ドイツ現代絵画の第一人者リヒターが1970年代から継続するシリーズの一作。スキージ(へら)を用いて平滑に仕上げられた色層が内包する、にわかにつえがたい奥行きと光のイリュージョンは、モネの絵画との親和性をうかがわせる。

モネへの オマージュ

—さまざまな「引用」のかたち

モネの絵画は、数多くのアーティストの制作において直接的に参照され、引用されてきました。とりわけ「睡蓮」は、モネを象徴するモチーフとして、古今の画家たちによって繰り返し描かれています。

それら「モネへのオマージュ」というべき作品群には、単なる「モチーフの引用」にとどまらない作家の創意を見出すことができます。色と形のリズムカルな反復、同一イメージの並列とヴァリエーション、観るものを包みこむような横長のフォーマット、クローズアップの構図など、おのおのの作家の関心にもとづいたモネの芸術へのアプローチが試みられています。

本章では、モネの絵画にインスピレーションを得た現代の作品群を紹介し、それぞれの創作におけるモネへの共鳴、モネからの継承を見出します。



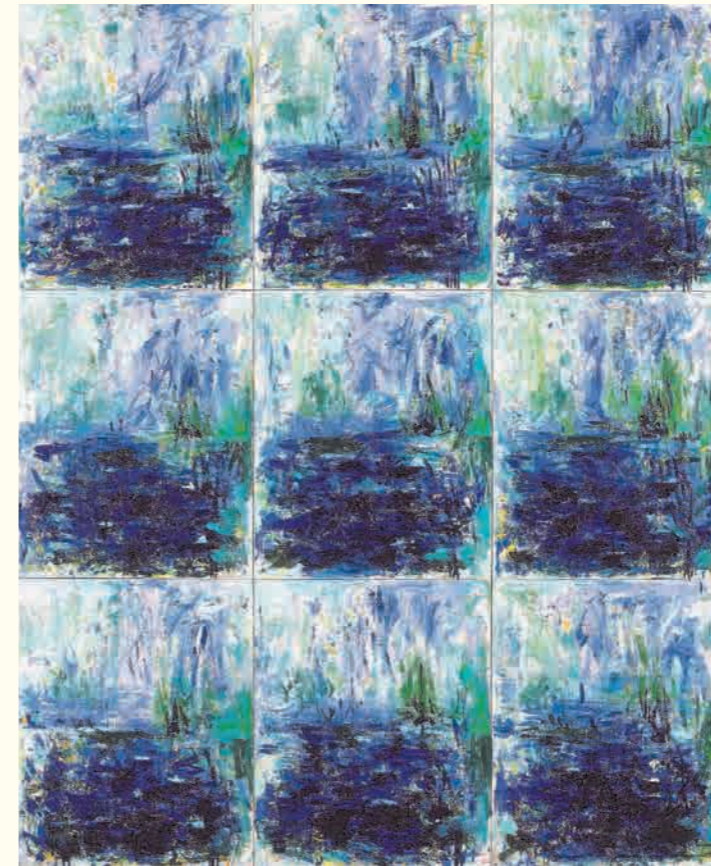
ロイ・リキテンスタイン《日本の橋のある睡蓮》
1992年 スクリーンプリントしたエナメル、ステンレス、彩色した額
211.5×147.3×4.5cm 国立国際美術館
© Estate of Roy Lichtenstein, N.Y. & JASPAR, Tokyo, 2018 E2965

「積みわら」をはじめ、モネの絵画をしばしば自作に引用したリキテンスタイン。形態の反復、色面分割、オールオーバー性、連作としての展開といったモネの芸術のさまざまな特性が、ポップアートの「工業的な手法」を介して誇張的に表現されている。



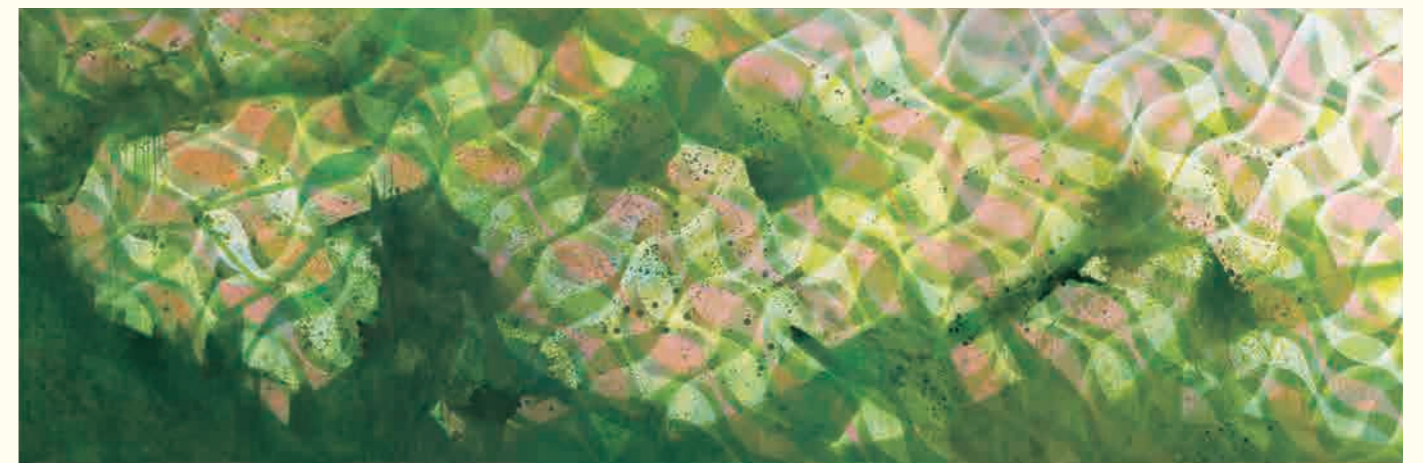
福田美蘭《モネの睡蓮》
2002年 アクリル、パネルに貼ったキャンヴァス、額縁(既製品)
86.3×116.5×8.3cm 大原美術館

大原美術館(倉敷)の中庭の池に浮かぶ睡蓮は、ジヴェルニーから株分けされたもの。福田はその「複製された」睡蓮の池をモチーフに、モネの絵画の再解釈を試みた。本作の「イメージの重層」という主題は、本展で発表される新作にも引き継がれる。



ルイ・カーヌ《睡蓮》
1993年 油彩 キャンヴァス 219.0×180.0cm
ギャラリーヤマキファインアート © ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2018 E2935

フランスの現代絵画を長く牽引するカーヌは90年代以降、モネの「睡蓮」に触発された連作も展開している。ほぼ同じ色彩、構図による9つの画面で構成された本作は、モチーフと色彩をリズムカルに反復させるモネの絵画の、カーヌ流の再提示といえよう。



堂本尚郎《連鎖反応—クロード・モネに捧げる》
2003年 油彩、キャンヴァス 130.0×390.0cm 個人蔵

1970年代後半から、流動する水面をメインモチーフとする「連鎖反応」シリーズを展開した堂本。そのなかで唯一「モネ」を題名に冠したのが、本作である。網目状のモチーフが水平方向に流れるように連続し、ダイナミックな画面を形づくっている。

M E S S A G E — 出品作家より —



松本陽子
MATSUMOTO Yoko

制作にゆきづまったとき私は、モネの睡蓮を見る。特徴ある色彩表現を体感する為だ。白、緑、ピンク、リズムのある筆触と絵具の集積は見事だ。画面は100年を経て少しの濁りや変化もなく透明で美しく、拡がりのある空間をも現出している。



鈴木理策
SUZUKI Risaku

19世紀半ばの写真の登場は画家たちに次は何をなすべきかを考えさせた。モネは知識ではなく、純然たる視覚だけで描くことを決意した。見えるものは対象の表面で起こる光の分散、その時、画家は眼そのものになる。



福田美蘭
FUKUDA Miran

写真提供:新潮社

色彩の重なりが生み出す精神的空間。ほとんど抽象画のようなモネの《睡蓮》を観るとき、眼がモネのまなざしに同化していく感覚をおぼえます。私はいま、その「まなざし」を意識した作品を、この展覧会に向けて制作しています。



クロード・モネ《睡蓮、水草の反映》
1914-17年頃 油彩、キャンヴァス 130.0×200.0cm
ナーマッド・コレクション(モナコ)

水面に浮かぶ睡蓮と、水辺に生い茂る草が、画面の両端から割り込んでくるように配置されている。その大胆なフレーミングと、やや横に長くとられた画面のフォーマットは、この時期に画家が着手したオランジュリー美術館の大装飾画との関連をうかがわせる。



サム・フランシス《Simplicity (SEP80-68)》
1980年 油彩、キャンヴァス 88.0×350.0cm セゾン現代美術館
© 2018 Sam Francis Foundation, California / ARS, N.Y. / JASPAR, Tokyo

1953年にオランジュリー美術館の大装飾画に魅了されたフランシスは、その数年後、色斑が画面内に点々と浮遊する独自の絵画空間に行き着く。色とりどりの斑点が巨大な画面のなかで奔放に戯れる本作は、その画業の集大成というべき一作。



鈴木理策《水鏡 14, WM-77》(左) 《水鏡 14, WM-79》(右)
2014年 発色現像方式印画 各120.0×155.0cm 作家蔵 © Risaku Suzuki, Courtesy of Taka Ishii Gallery

鈴木が2014年から継続している「水鏡」は、モネが執着した水面のヴィジョンを主題とした写真シリーズ。平らな「面」のうえに立ち現れる、実像と虚像とが折り重なった複雑なイメージの交錯を、「機械の眼」を介して捉えなおす試みといえよう。

フレームを越えて — 拡張するイメージと空間

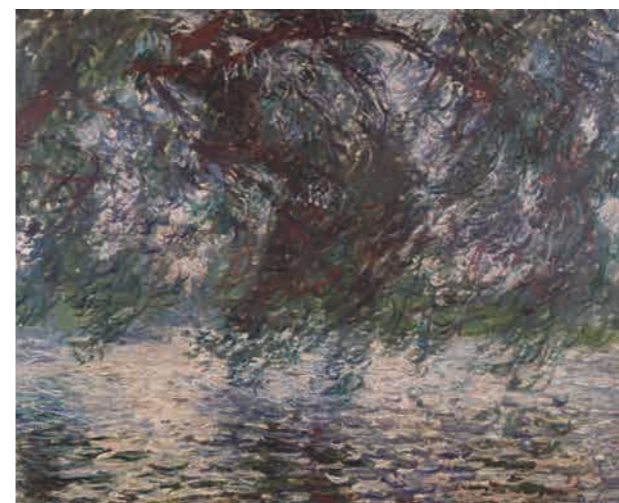
1900年代以降のほとんどの作品のモチーフとなるジヴェルニーの自邸の庭で、モネは体の衰えと重度の白内障に悩まされながら、画業最後の創作活動に没頭しました。

そのハイライトである「睡蓮」の連作においてモネは、極端なクローズアップによって画面いっぱいに水面を捉えた構図をとるようになります。中心を喪失した画面内でリズムカルに反復するモチーフが、豊かな色彩や奔放に躍る筆の動きとあいまって、イメージがフレームの外まで広がっていくような感覚を生み出しています。

観賞者をも取り込んで絵画空間を拡張させようとするモネの欲求は、最晩年のオランジュリー美術館の《睡蓮》大装飾画へと行き着きます。そこに集約された独自性、革新性に後世の芸術家や批評家が気づくのは、第二次世界大戦後のことでした。

本章では、「睡蓮」の連作を中心としたモネ後期の作品を展示し、色彩・形態の反復、空間の拡張への志向などを切り口に、現代アートとの接点を探ります。

睡蓮の主題で一室まるごと飾りつけてみたい。(中略)
そうすれば、終わりのない全体が、
水平線も岸辺もない水の広がり
の幻影が、
そこに生まれるだろう



クロード・モネ《柳》
1897-98年頃 油彩、キャンヴァス 71.0×89.5cm 個人蔵(国立西洋美術館に寄託)

逆光を浴びた柳が川面の際まで頭を垂れ、水面にその影を落としている。モネのセーヌ河をモチーフとした連作のうちのひとつだが、本作では抑制された色遣いと荒々しい筆致とがとりわけ際だっており、木、空、水が渾然一体となった画面が生成されている。



松本陽子《振動する風景的畫面》
2017年 油彩、キャンヴァス 200.0×250.0cm 個人蔵 © Yoko Matsumoto

本展に出品される松本の2点の絵画は、一方は長年用い続けていたピンク色、他方は近年取り組んでいる緑色を主調とした作品であり、共通の題名をもつ。絶えず揺れ動きながら拡張する磁場のような絵画空間が、ひとつの自立した「風景」として提示されている。

モネ それからの100年 MONET'S LEGACY

会期 2018年7月14日(土)～9月24日(月・休)
会場 横浜美術館
開館時間 午前10時～午後6時(9月14日[金]、15日[土]は午後8時30分まで) ※入館は閉館の30分前まで
休館日 木曜日(8月16日は開館)
主催 横浜美術館、東京新聞、テレビ朝日
後援 在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本
協賛 トヨタ自動車、三井住友海上火災保険、光村印刷
協力 日本航空、FMヨコハマ、みなとみらい線、横浜ケーブルビジョン、首都高速道路株式会社

観覧料 一般 1,600 (1,400/1,500)円
大学・高校生 1,200 (1,000/1,100)円
中学生 600 (400/500)円

前売券・早割ペアチケット(数量限定)は3月23日(金)、
グッズセット券(数量限定)は4月28日(土)に発売
詳細は公式サイトで随時発表

※小学生以下無料

※65歳以上の当日料金は1,500円(要証明書、美術館券売所でのみ販売)

※()内は前売/有料20名以上の団体料金(要事前予約、美術館券売所でのみ販売)

※毎週土曜日は高校生以下無料(要生徒手帳、学生証)

※障がい者手帳をお持ちの方と介護の方(1名)は無料

※観覧当日に限り本展の観覧券で「横浜美術館コレクション展」も観覧可

【チケット販売場所】 ※手数料がかかる場合があります。

横浜美術館、展覧会公式サイト、電子チケット「スマチケ」、イープラス、チケットぴあ(Pコード:768-788)、

ローソンチケット(Lコード:31795)、CNプレイガイド、楽天チケット、Yahoo! チケット、Tチケット、主要コンビニ店頭など

お問合せ 03-5777-8600 (ハローダイヤル)



展覧会公式サイト

<http://monet2018.yokohama.jp>

モネ 横浜

検索

展覧会公式 Twitter

@monet2018.yokobi

展覧会公式 Instagram

monet2018_yokobi

◎本展広報に関するお問合せ

「モネ それからの100年」広報事務局(ウインドム) 担当: 沼澤、梶、多田

TEL: 03-5642-3765 FAX: 03-3664-3833 e-mail: monet2018@windam.co.jp

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9 ヤマナシビル4F

◎名古屋展(先行巡回) 2018年4月25日(水)～7月1日(日) 名古屋市美術館

※名古屋展に関するお問合せ: 中日新聞社事業局文化事業部(TEL: 052-221-0729)



東京新聞

tv asahi



〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1 TEL: 045-221-0300 FAX: 045-221-0317

【アクセス】 みなとみらい線(東急東横線直通)「みなとみらい駅」3番出口から徒歩3分 / JR、横浜市営地下鉄「桜木町駅」から「動く歩道」を利用、徒歩10分